

草原の中に出て急に幅廣く不規則になつた道の面にはそちこちに水溜が月を映してゐた。兩側は不規則な所々耕して野菜らしいものが植付けてあつた。林の中に赤く灯をこもしてゐる藁屋の窓が見える。何となく人里近くなつた様な景色がなつかしかつた。

低い山々が眞黒く遠卷にしてゐた。すつかり昇りつめて今盆地の中央に湛へられた湖水へと急いでゐるのである———そういふ意識が楽しく胸を踊らせた。道は雑木林を出たり入つたりした。ふと行く手の林の細い幹の間に布を展げかけた様な白いものが見え出した。瀧であらうか、但しは谷から湧昇る霧であらうか或は目的の湖だらうかと云ひ争ひ乍ら近づくとつれチラ／＼と月光を射返してゐる浪が見えて來た。風が出て細かくそよぐ樹葉の間から目覺める様な赤い灯が一つ二つと見え出した。道が一曲りした拍子に灯の群が一時にバツと眼を射て表れた———遊覽地らしい街の灯の群が。

いかにせむ暮れゆく年をしるべにて

身を尋れつゝ老は來にけり

三 宮

人知れず暮れゆく年を惜むまに

春といふ名の立ちぬべきかな

藤原成道朝臣

國分寺まで

S.

T.

「いいとこね、こゝは」。友は洋傘をすぼめた。何の木か枝の多い喬木が立ち並んでゐて、茂つた葉かげにおほはれて日の影もさゝず、冷々とする快さを貪つて私達が暫く休んでゐる間、小鳥の聲も聞えなかつた。木立を出て見ると、軽いめまひを覺えさせる様な日の光が暖かに照つて、澄みきつた空には毛糸をほぐしたやうな白い雲が散らばつてゐた。少し行くと丹塗のはげかゝつた山門が見えて來た。深大寺である。石段の前の崖から二筋の小さな瀧が落ちて、きれいな小川になつて村を流れてゐる。崖の上には地藏尊が安置してあつた。人の有難がる水であらうが、私達はそれに手を浸したり、飲んだり、終には、ハンカチを濡したりして喜んだ。境内には珍しい大木の木犀があつた。今が盛りで、ごこから見ても何ともいへず美しかつたあたりのものを酔は

せる様な香を放ち、落ち散つたその小さな花片は樹下を黄色く彩つてゐる。寺を辭して田圃道を歩いて街道へ出た。お祭と見えて軒毎に赤い提燈が吊られ、美しい花傘が風にまはつて居たが、人通りは少く遠くで太鼓の音がしてゐた。府中の町に出るまでには、かなりの道程があつた、路傍は茅葺の家許りで、紫苑の植ゑられた垣根や、露草の叢咲いてゐる屋根や、初秋の村には何となく趣のある家が多かつた。生垣をめぐらした家や瓦屋根がふえて來たと思ふといつか府中の町に入つてゐた。大國魂神社は、老杉の茂つた、如何にも古さうなお社であつた。神主に乞うて座敷に案内せられ、そこでお辨當を食べた。庭石を蔽ふまで秋海棠の咲いてゐるのも嬉しかつた。そこを出て社の前の並木道を過ぎ、眞直に國分寺へ通ふ道を歩いていつた。

道の兩側には秋草が咲き亂れてゐて道も埋まりさうであつた。

芒はもう眞白にはほゞけてゐるのもあり、まだ十分に房をさばき得ずして、半、句葉にくゞられてゐるものもある。それに朗らかな日影がさして、丁度、絹糸の様に光つて靡いてゐる。ところ／＼その中に秋のあはれを背負つて立つてゐる様な吾毛香の交つてゐるものもいゝ。私は折々に見つける女郎花を折りながら歩いてゐた。「あら、鈴虫が鳴いてゐますよ」と友は立ち止つて、一寸頭を傾けながら聞き入つて居る。虫は一心に鳴いてゐる。そして我と我が聲に驚いたかの様に、時々、鳴き止んではまた鳴き出す。氣がつくと、道は自然に曲つてゐて、前にも後には私等二人の外は誰も見えない。誰かと呼んでゐる様な氣がする。ふと不安になつて來た。友の影はまだ見えない。虫は矢張りあせせらさず、迫らずに鳴いてゐる。やつと思ひ切つて少しあとへ戻つて見ると、二三人の傘が見え出した。急いで辿りついて見ると、道はこゝから折れるのだといふ。そこからは、林の中の殆ど埋れかかつた

徑をわけ入らなければならぬ。林には武藏野特有の若々しい樹が枝を張つてゐて、下には葛や、藤袴や、女郎花や、稀には白い男郎花など咲きはこつてゐる。中へ入る程、虫の聲は高くなつて、殆ど降る様に聞えて來る、虫の聲に耳を傾けながら、花を折りながら、私達は歩いていつた。

林は四五町でつきて、稍、廣い道に出た。見ると高くなつたすゝきの蔭に先登に歩いてゐた友が五六人、先生と休んでゐる。喜んで走つて行くと、先生は靜かに右手を舉げて、「其處が國分寺の趾です」と仰しやつた。

當時の礎らしい石が五つ六つ残つてゐて、四邊には筋などの入つた古代の瓦の碎片が一面に落ちてゐる。しかし、見渡すところ、古の大伽藍の跡も、今はたゞ、稻波の寄する野原にすぎない。落ち散つた古瓦の數片を拾ひ、千餘年の昔を憶うて、私達は暫くそこを立ち去りかねたのであつた。

雜報

第三十三回文科學術談話會記事

大正四年十月十六日午後一時開會

順序

- 一 開會の辭
- 一 青年より見たる青年期
- 一 英語朗讀 In the tower.
- 一 横須賀港の沿革
- 一 國語朗讀 夕立雲
- 一 近世日本畫に於ける二運動の消長
- 一 閉會の辭 (午後四時)

文四	蚊	泉	靖	子
文一	矢	島	愛	子
文三	西	田	彌	生
文二	田	中	八	重
	澤	村	先	生

昨夜來の雨がからりと霽れて、土も空氣もどこかしめつてゐながら、快い午後であつた。扇形につくられた會場の前方の席には校長、垣内先生、小此木先生を御見受けした。今回は賛助員の方々が多數來會して下すつたので心強い感じがして嬉しかつた。

青年より見たる青年期の心理研究、これは題材としても面白いもので、殊に實驗の材料が會員の多數から出たので多大の興味をもつて待たれたものであつた。しかししたマスタンレーホールの説を證明するものと